

# 久留米城下町遺跡

-第28次発掘調査報告-

平成31(2019)年3月  
久留米市教育委員会

## 序

久留米市は「水と緑と人間都市」の基本理念に基づき、「誇りがもてる美しい都市久留米」を目指しています。その取り組みのひとつとして、久留米の歴史を調査し、記録を残し、多くの人々に知っていただくことで、郷土愛を育めるよう努力しています。

久留米城下町遺跡第28次調査では近世の井戸や大甕などが発見され、当時の城下の中心地としてにぎわった当地の様相を確認することができました。

なお、今回の発掘調査に際して、土地所有者ならびに近隣住民の皆様に多大なご協力をいただきました。心から御礼申し上げます。

平成31年3月31日

久留米市教育委員会  
教育長 大津 秀明

## 例言

1. 本書は、平成29年度に瀬利徳氏の委託を受けて、共同住宅建設に先立ち実施した、久留米城下町遺跡第28次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が主体となり、市民文化部文化財保護課の小川原励が担当した。
3. 遺構実測図の作成は、小川原、発掘調査臨時職員の中村麻衣、藤木幸子、専任非常勤職員の米澤美詠子、整理作業臨時職員の丸山裕見子が行い、浄書は小川原、専任非常勤職員の今村理恵が行った。遺物実測図の作成は、丸山が行い、浄書は今村が行った。
4. 遺構写真はマミヤR Z 67、遺物写真はデジタルカメラCANON EOS 6 D、リコーPEN TAX K-1 IIを用いて小川原が撮影した。
5. 図面の方位は全て座標北を示す。基準点の座標は、国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を用いた。なお、平成28年の熊本地震に伴うパラメータ補正を行っている。
6. 遺構の略記号は、SA-柵列、SE-井戸、SK-土坑、SX-不明遺構を意味する。
7. 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
  - ・ 法量の単位はcmである。（ ）は復元値、および残存値を、-は欠損または該当する部位が無いことを示す。
  - ・ 遺物の色調は、『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、平成9年）に拠った。
8. 出土遺物観察表と写真図版の遺物番号は同一である。
9. 出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
10. 本調査の略記号はLKM-028、調査番号は201720である。
11. 本文の執筆・編集は小川原が行った。

## 本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	15

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成29年10月24日、土地所有者の瀬利徳氏から、久留米市中央町34-1、2、3、13、14、15における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地である久留米城下町遺跡の範囲内であり、確認調査でも遺構が確認されていたため、発掘調査が必要である旨を回答した。12月1日に土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、土地所有者と久留米市長檜原利則は、平成29年12月14日付で久留米城下町遺跡第28次調査の協定書と委託契約を締結した。調査範囲は建物建設予定地で、攪乱による影響が少なく、掘削可能な範囲に設定した。調査面積は104㎡である。

現地での発掘調査は、平成30年1月10日に着手して3月14日に終了し、平成31年3月31日まで作業と報告書作成を行った。

## 2. 調査の体制

		平成29年度	平成30年度
調査委託者：瀬利 徳			
調査主体：久留米市教育委員会	教育長	大津 秀明	大津 秀明
調査総括：久留米市市民文化部	部長	野田 秀樹	松野 誠彦
	文化芸術担当部長	甲斐田忠之	宮原 義治
	次長	西村 信二	西村 信二
文化財保護課	課長	馬場 博文	水島 秀雄
	課長補佐	山崎万里子	久保田由美
	主査	水原 道範	水原 道範
	事務主査	塚本 映子	塚本 映子
	庶務担当	豊福 早苗	市村久美子
			古賀 文子
	調査担当	小川原 励	小川原 励
	整理担当	米澤美詠子	米澤美詠子
		岩坪 純子	岩坪 純子
		宮崎 彩香	今村 理恵
			宮崎 彩香

### 発掘調査臨時職員

高尾 春代、田中 樹子、中村 麻衣、藤木 幸子、二村 智治、由布 幸子、丸山 幸  
渡辺 しげ子、渡辺 やつ子

### 出土品整理作業臨時職員（平成30年度）

丸山 裕美子

### 3. 調査の目的と経過

調査地は江戸時代の片原町にあたる。当該期の町屋の遺構の状況を確認することを目的として調査を行った。廃土置き場の確保のため、調査区を西部と東部2つに分けて掘削した。平成30年1月10日に器材搬入、12日に西部から重機による表土剥ぎを行った。複数の文化層が重なっていたが、遺構の検出が可能な造成後の面を遺構検出面とした。各遺構の測量、実測、写真撮影を行い、2月8日に調査区西部の全体写真を撮影した。撮影終了後、2月14日から16日にかけて反転し、西部の埋戻しと東部の表土剥ぎを重機によって行った。想定以上の廃土が出たため、廃土置き場が確保できずに西部と東部の境目の調査を一部できなかった。各遺構の測量、実測、写真撮影を行い、3月7日に調査区東部の全体写真を撮影し、3月14日に重機による埋戻し、機材撤収を行った。

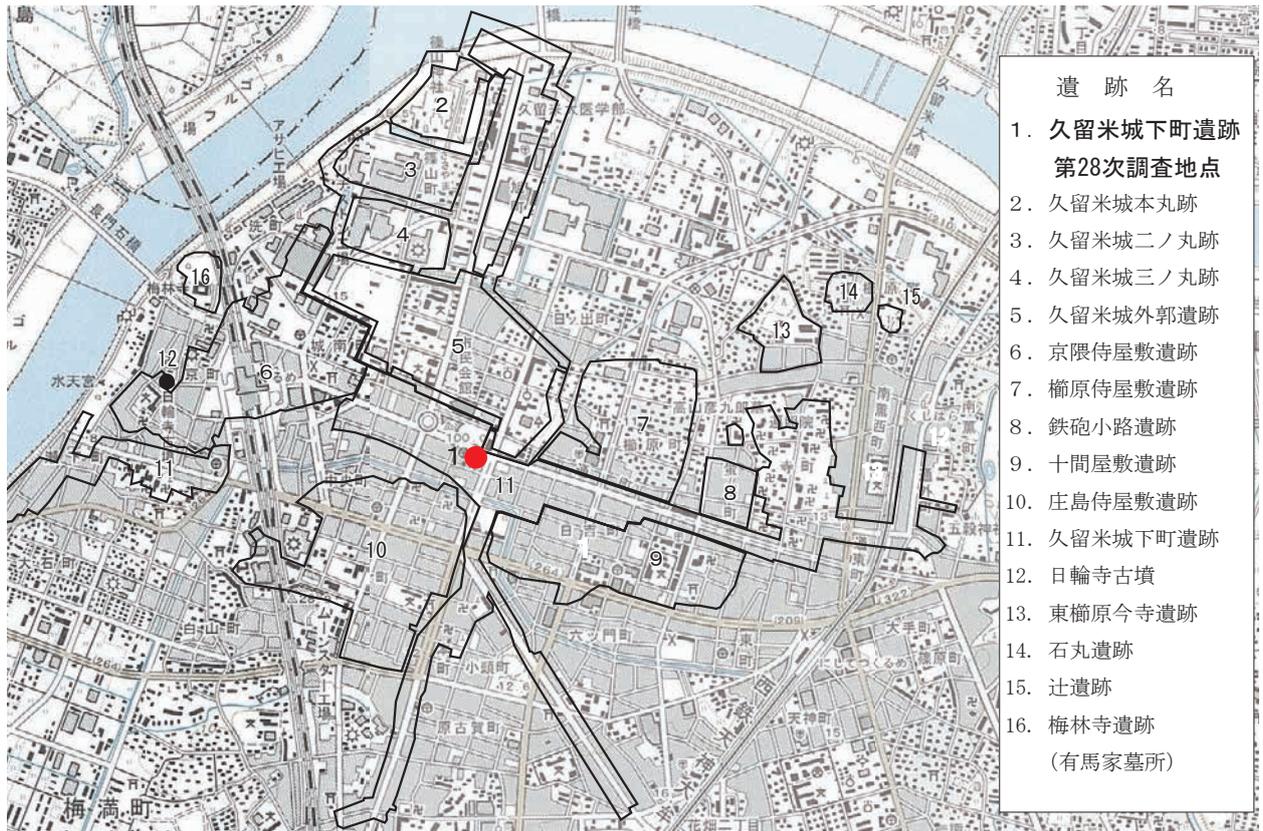
遺構配置図はトータルステーションを用いて測量し、測量データは株式会社CUBIC製の「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、一部の遺構、土層図は糸切りメッシュ法（ $S=1/10$ ）で記録した。記録写真は、モノクローム・カラーリバーサルともに6×7判で撮影した。

## II. 位置と環境

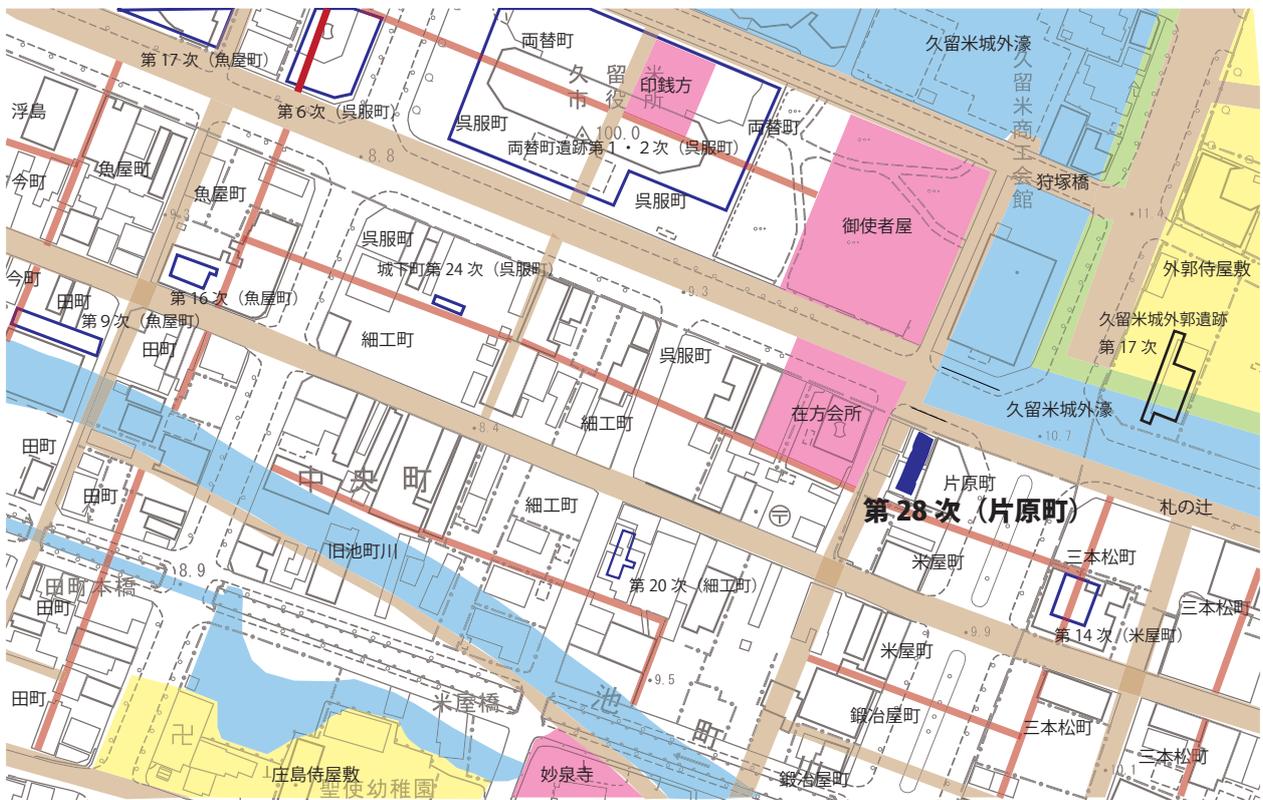
久留米市は九州の北部、筑後川の中・下流域にあたり、筑紫平野の中心に位置する。久留米城下町遺跡は久留米市街地の中心部にあり、筑後川が南西に屈曲しながら西流する左岸に位置し、更新世の堆積物によって形成された低位段丘上に立地する。

周辺の遺跡で発見された最も古い遺物は、久留米城外郭遺跡第19次調査から出土した旧石器時代のナイフ形石器である。弥生時代前期から中期前半にかけては、東櫛原今寺遺跡、石丸遺跡、辻遺跡など低位段丘上に大規模な甕棺墓群が営まれている。古墳時代には日輪寺古墳が営まれる。この古墳を造営した生活基盤となる集団の全体像は不明である。中世においては、西久留米村の存在がうかがえる。戦国時代には、久留米城が高良山勢力の出城として造営され、高良山座主の弟麟圭がしばらく久留米城を拠点として、天正11年（1583）頃には龍造寺方と結んで座主良寛や大友方と対峙したとされている。秀吉の九州国割の結果、小早川秀包が関ヶ原合戦まで14年間久留米城に在城した。本調査地北西50mの両替町遺跡第1次調査では、小早川時代のキリシタン教会の建物や十字をあしらった瓦などが発見されており、調査地周辺に城下町が形成されたことがわかる。その後関ヶ原の功績で田中吉政が筑後国の国主として柳川城に入城すると、久留米城はその支城とされ、柳川往還や三本松町、洗切、内町、長町などが整備された。田中家の断絶による改易後、元和7年（1621）に久留米城主となった有馬氏によって城郭や城下町の拡張が行われた。

本調査地は池町川の旧流路に沿うように東西に延びる標高10m程の低湿地に造成を行っている。天保年間（1831～1845）には片原町に位置し、北側には外堀、西隣には在方会所、北西には藩の迎賓館である御使者屋がある。これまでの周辺の調査では「片原町 福童屋」と書かれた貧乏徳利が複数出土している。



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 久留米城下町遺跡第28次調査位置図 (1/2,500)

### Ⅲ. 調査の記録

#### 1. 基本層序 (第4・15・16図)

調査地は調査前に建物が建っており、大半が攪乱によって削平されていた。調査区南西部で褐色砂質土、北東部で灰色砂質土が表土として堆積し、表土以下に近代以前に堆積した層が重なる。調査区南西部では暗灰色砂質土、調査区中央部では白色粘質土、調査区北東部では黒色粘質土の上面で遺構検出が可能であると判断し、遺構検出面を決定した。遺構検出面以下の層からは遺物が遺構や遺物が確認できず、層と層の境界の差が明らかなため、造成の際の盛土である可能性が高い。北側から南に向かって順に褐色粘質・シルト質土、黒色粘質土、白色粘質土を堆積させたと考えられる。造成前の地山面は青灰色・灰色粘質土で、水気を多く含み、直径5cm程度の木杭の痕跡を確認した。

#### 2. 検出遺構

今回の調査では、柵列1条、井戸3基、土坑11基、不明遺構1基およびピット多数を検出した。以下、各遺構について述べる。

##### 柵列

##### SA5 (第3図)

調査区南西部で3基の礎石が遺構検出面にわずかに埋まった状態で検出した。据えられた石の間隔は1.5m、2mで等間隔ではなく、それぞれの石の法量も大きく異なるが、石の上面が平坦で直線的に並ぶことから礎石とした。軸はN-20.5°-Eをとる。柱列の広がりの確認できなかったため柵列としたが、礎石建物である可能性がある。また、他にも礎石が存在していたが、重機で掘り起こした可能性もある。所属時期は不明である。

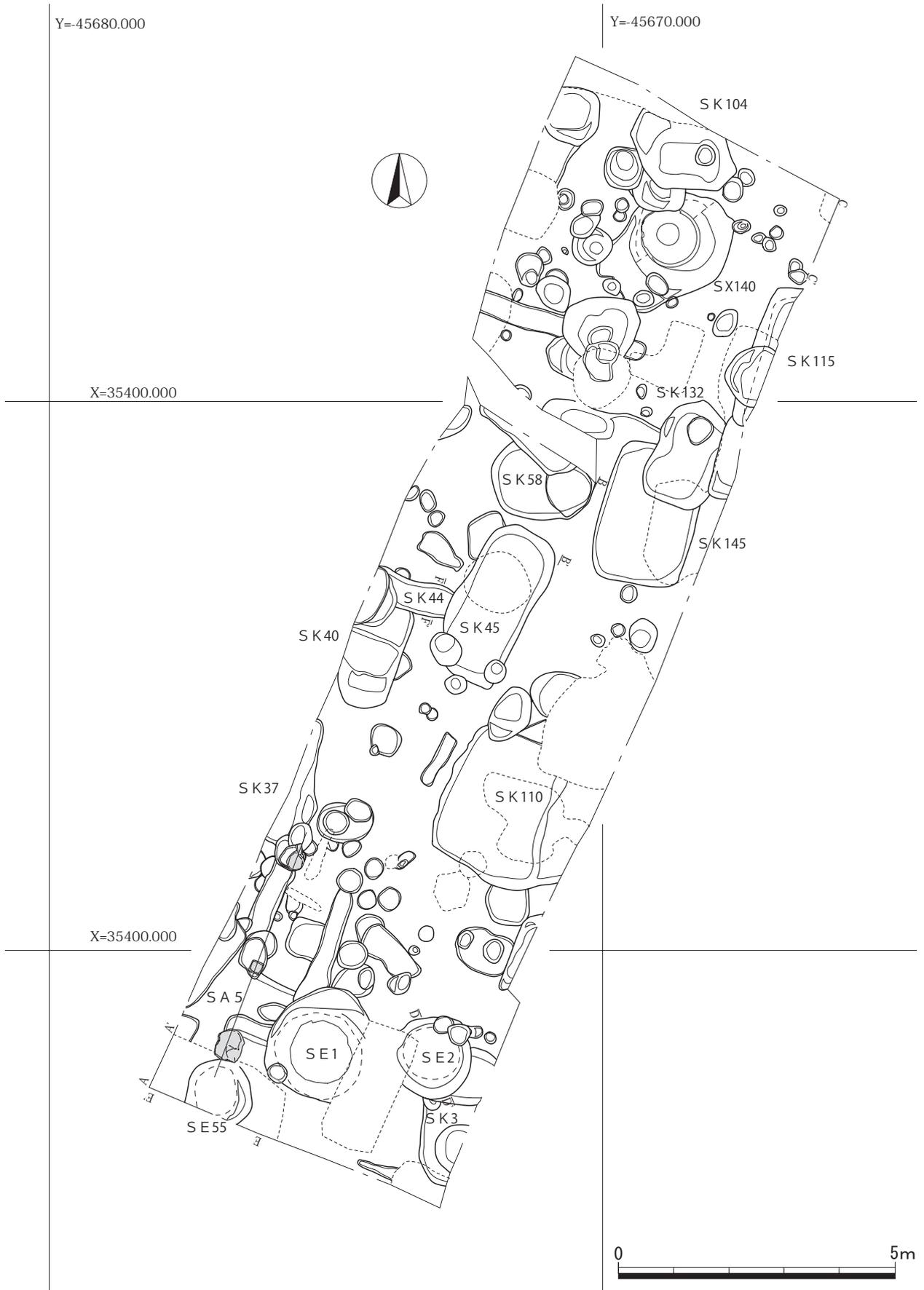
##### 井戸

##### SE1 (第5・17・19図)

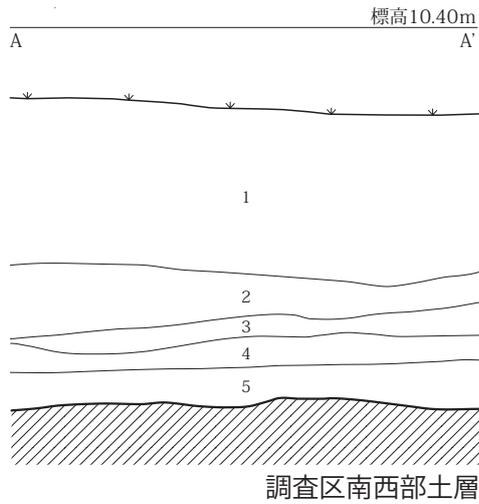
調査区南部で検出した。緩やかにカーブを描いた長さ0.8m、幅0.4m、厚さ0.06m程度の凝灰岩を組み合わせて枠にした井戸である。東半は試掘トレンチによって削平されている。一部、枠が壊れている部分や裏込めに漆喰を施す。掘方の平面形は楕円形で、北側に段を有する。石組の平面形は円形を呈する。井戸は遺構検出面の上位から続いていた。掘方は長軸2.1m、短軸1.5m以上、深さ1m以上を測る。完掘はしていない。石組は直径1.1mを測る。近世陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、金属製品、ガラス製品などが出土しており、石組内部からは明治以降、掘方からは19世紀中頃の遺物が出土している。

##### SE2 (第5・18・19図)

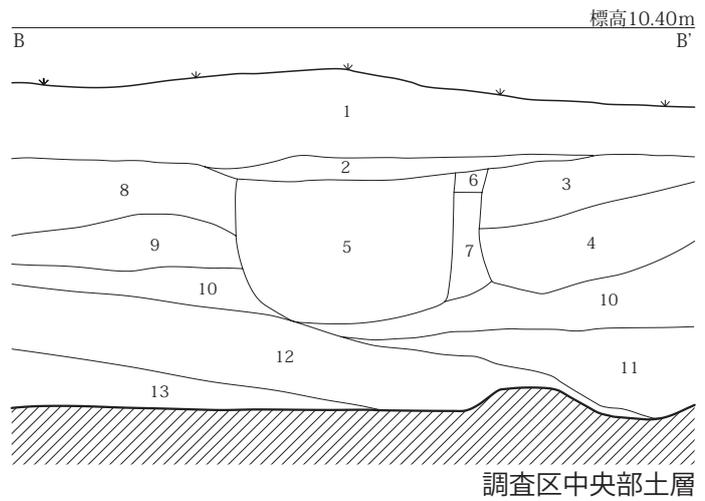
調査区南部で検出した。SE1の東隣りに位置する。平面形は円形を呈し、西側は試掘トレンチに削平される。直径1.5m、深さ1.2m以上を測り、SK3に後出する。完掘はしていない。近世陶磁器、土師器、石製品、金属製品が出土しており、18世紀前半に属する。



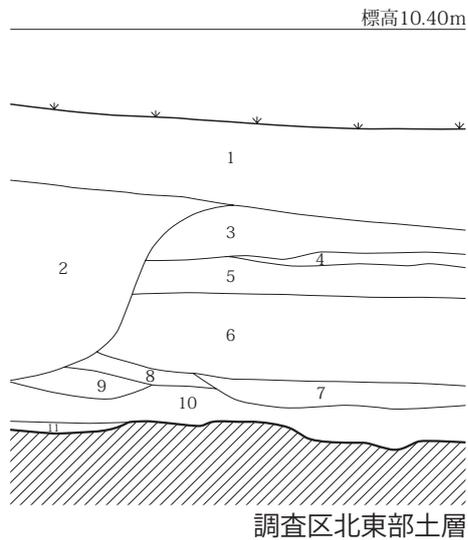
第3図 遺構配置図 (1/100)



1. 褐色砂質土。礫、煉瓦を多量に含む。
2. 褐色砂質土。黄褐色粘質土ブロックを多量に含む。
3. 暗灰色粘質土。黄褐色粘質土ブロックを多量に含む。
4. 白色粘質土+黒色粘質土。白色粘質土が大部分を占める。
5. 白色粘質土+黒色粘質土。黒色粘質土が大部分を占める。部分的に青灰色に変わる。



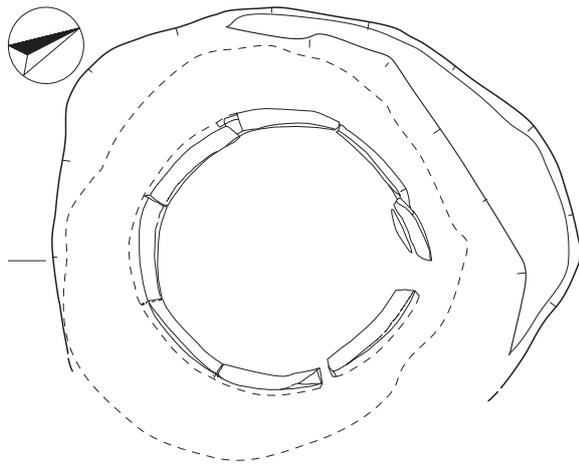
1. 褐色砂質土。礫を多量に含む。
2. 橙色粘質土。
3. 橙色シルト質土。
4. 橙色粘質土+白色粘質土。
5. 暗褐色粘質土。礫を多量に含む。
6. 暗褐色粘質土。礫を多量に含む。
7. 灰白色シルト質土。
8. 褐色シルト質土。
9. 褐色シルト質土。橙色粘質土ブロック、炭化物を含む。
10. 白色粘質土。暗灰色粘質土ブロックを多量に含む。
11. 暗灰色粘質土。白色粘質土ブロックを多量に含む。
12. 黒色粘質土。橙色ブロックをわずかに含む。
13. 褐色粘質土。



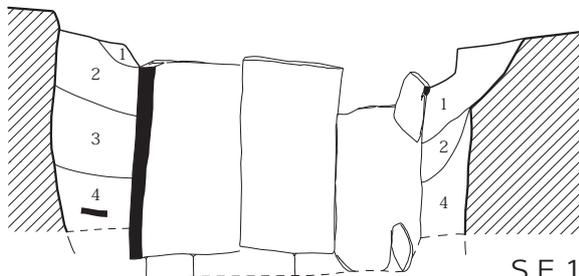
1. 灰色砂質土。礫を多量に含む。
2. 暗灰色粘質土。
3. 灰色粘質土。
4. 白色粘質土。
5. 暗灰色粘質土+黄褐色粘質土。
6. 黒色粘質土。橙色粘質土ブロックを含む。
7. 褐色粘質土。
8. 褐灰色シルト質土。白色・橙色粘質土ブロックを多量に含む。
9. 褐灰色シルト質土。白色粘質土ブロックを含む。
10. 灰色シルト質土。
11. 青灰色シルト質土。



第4図 調査区土層図 (1/30)

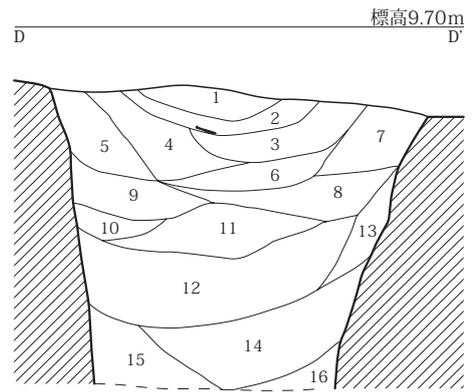


標高9.70m



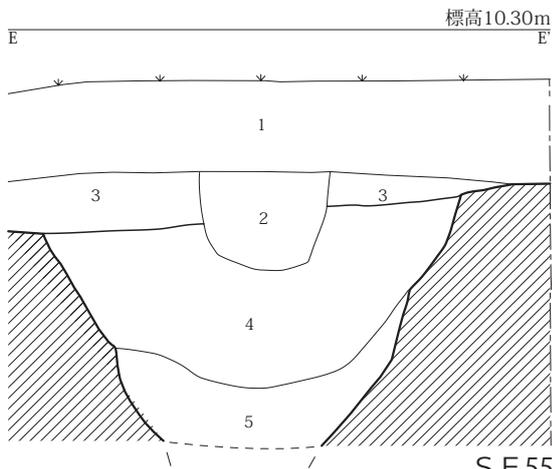
SE 1

1. 暗褐色シルト質土。
2. 暗褐色シルト質土。わずかに白色粘質土ブロックを含む。
3. 暗褐色シルト質土。白色粘質土ブロックを多量に含む。
4. 暗褐色シルト質土+黄褐色粘質土。白色粘質土ブロックを含む



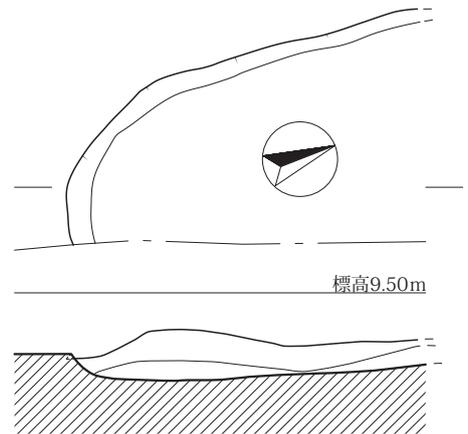
SE 2

1. 暗褐色粘質土。橙色粘質土ブロック、炭化物を含む。
2. 灰色砂質土+橙色砂質土。炭化物を含む。
3. 暗褐色粘質土。橙色粘質土ブロックを含む。
4. 暗灰色シルト質土。白色、橙色粘質土ブロックを含む。
5. 暗灰色砂質土。橙色ブロックを含む。
6. 暗灰色砂質土。白色粘質土ブロックを含む。
7. 暗褐色粘質土。橙色・白色粘質土ブロックを含む。
8. 暗褐色粘質土。白色粘質土ブロックをわずかに含む。
9. 橙色粘質土+暗灰色砂質土。
10. 暗褐色砂質土。
11. 暗灰色砂質土。10～20 cm大の礫を含む。
12. 暗褐色粘質土。白色・橙色粘質土ブロック、炭化物を多量に含む。
13. 暗褐色シルト質土。
14. 暗灰色シルト質土。白色粘質土を多量に含む。橙色粘質土ブロックを含む。
15. 暗灰色シルト質土。白色粘質土ブロックを多量に含む。
16. 暗褐色シルト質土。白色粘質土ブロックを含む。



SE 55

1. 暗褐色シルト質土。礫、煉瓦を含む。
2. 橙色砂質土+暗灰色砂質土。
3. 暗灰色砂質土。橙色粘質土ブロックを多量に含む。
4. 黒色シルト質土。炭化物を多量に含む。橙色粘質土ブロックを含む。
5. 暗灰色シルト質土。白色粘質土ブロックを多く含む。



SK 3



第5図 SE 1・2・55、SK 3土層図、実測図 (1/30)

#### **SE55** (第5図)

調査区南部で検出した。上部は重機で掘削してしまい確認できなかった。平面形は円形で、東部に段を有する。直径1.6m以上、深さ1m以上を測り、SA5に先出する。近世陶磁器、土師器が出土しており、17世紀後半に属する。

#### **土坑**

#### **SK3** (第5図)

調査区南部で検出した。平面形は楕円形または隅丸方形を呈すると考えられる。長軸1.6m以上、短軸1m以上、深さ0.2mを測る。近世陶磁器、土師器、瓦、瓦質土器、石製品、金属製品が出土している。19世紀後半の紅皿が出土しているが、大半の出土遺物は17世紀前半であるため、遺構は17世紀前半に属し、紅皿は後世遺構からの混ざり込みである可能性が高い。

#### **SK37** (第6図)

調査区西部で検出した。西半が調査区外へ延び、全容は不明だが、平面形は楕円形または隅丸方形を呈すると考えられる。東側に段を有する。長軸2.4m、短軸0.6m以上、深さ0.2mを測る。近世陶磁器、土師器、瓦質土器が出土しており、17世紀前半に属する。

#### **SK40** (第6・20図)

調査区中央部で検出した。平面形は楕円形を呈すると考えられ、南北に段を有する。長軸1.9m以上、短軸1m以上、深さ0.6mを測り、SK44に先出する。埋土には多量の礫を含み、近世陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、金属製品が出土しており、17世紀後半に属する。

#### **SK44** (第6図)

調査区中央部で検出した。SK45に先出し、東部はSK45以上に延びず、西部は調査区外へ延びる。土坑としたが溝である可能性がある。平面形は楕円形または隅丸方形と考えられる。長軸1.4m以上、短軸0.6m、深さ0.3mを測る。近世陶磁器、土師器が出土しており、17世紀前半に属する。

#### **SK45** (第6・21～23図)

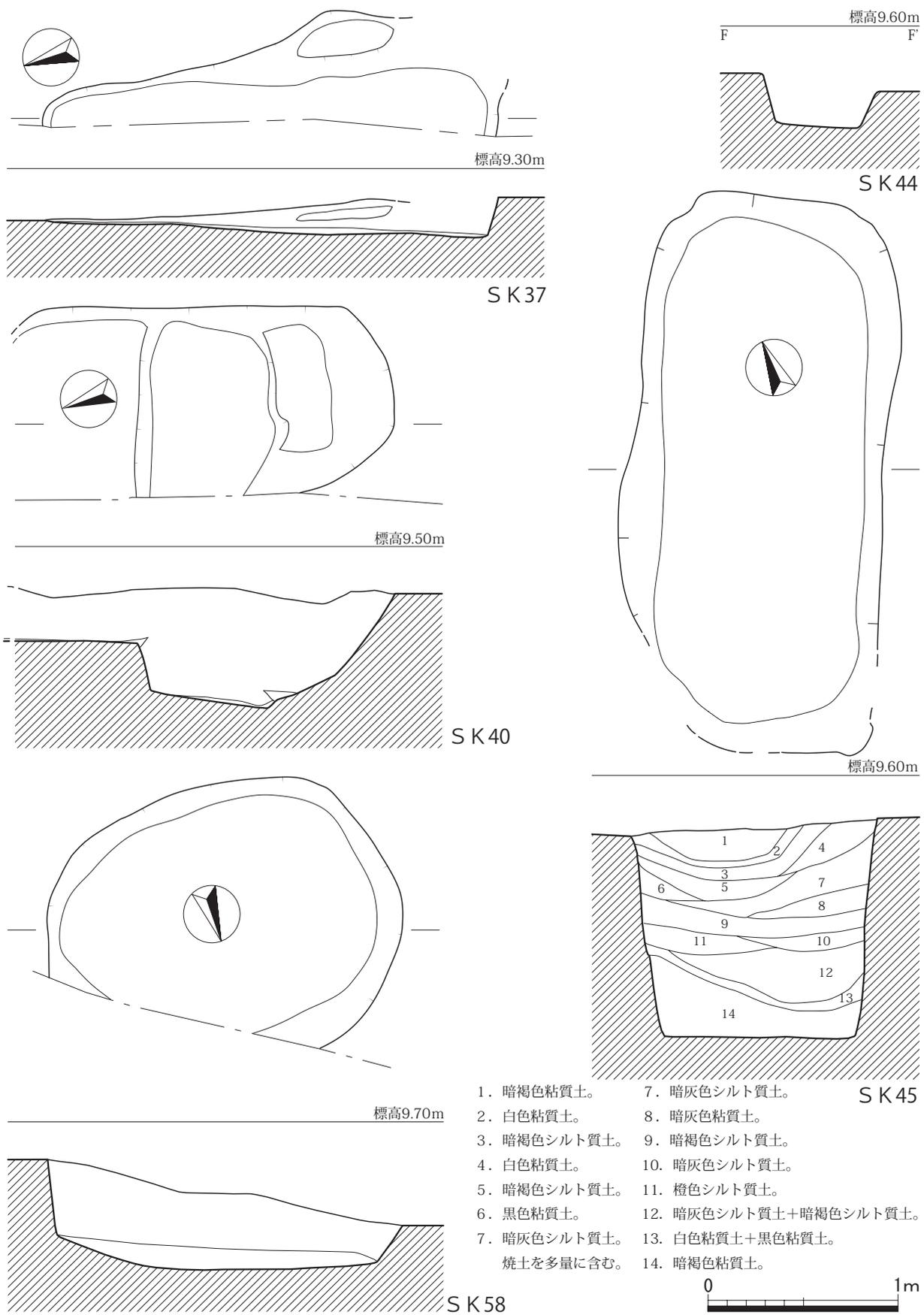
調査区中央部で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。長軸3m、短軸1.4m深さ1.4mを測る。埋土は炭化物や焼土を多量に含んでいる。近世陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、石製品、土製品、金属製品が出土し、18世紀前半に属する。瓦や壁土が被熱を受けている。

#### **SK58** (第6・24図)

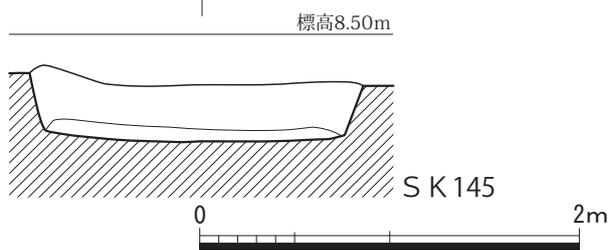
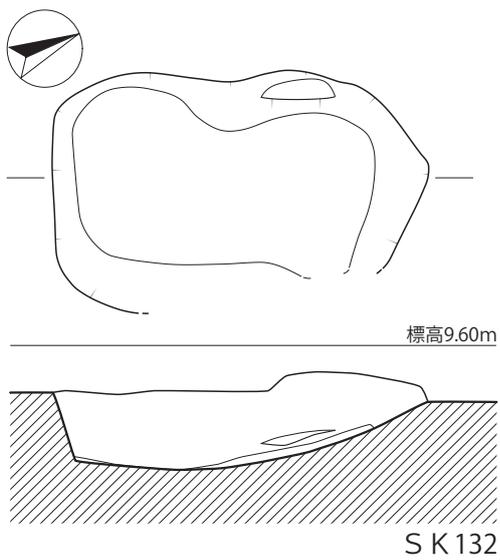
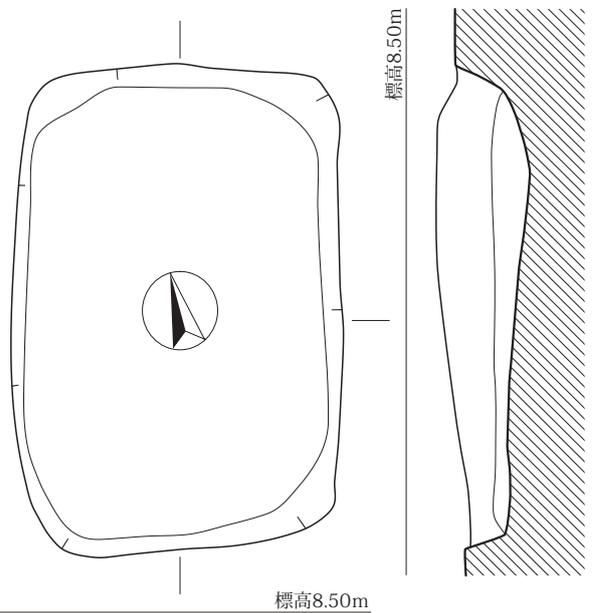
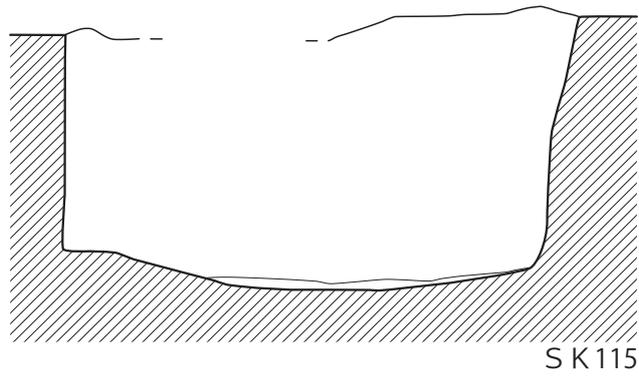
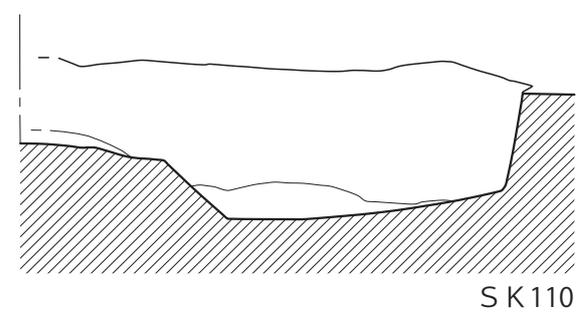
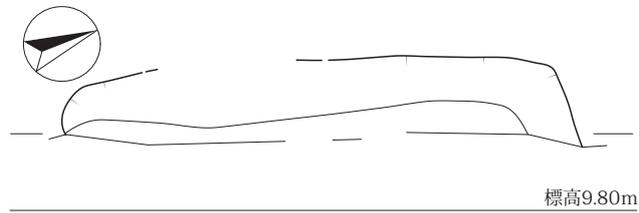
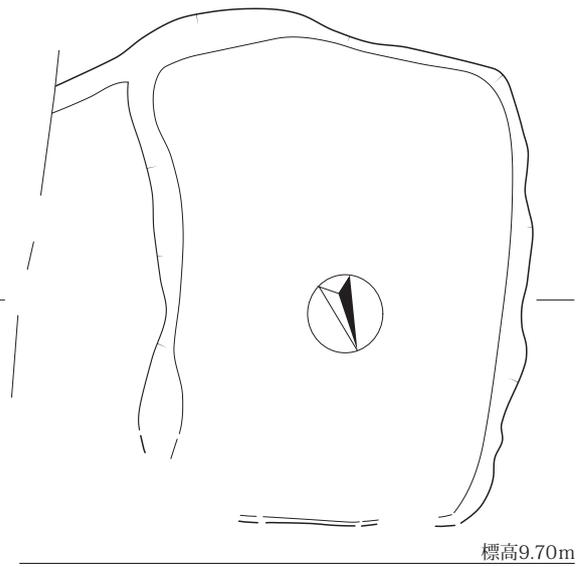
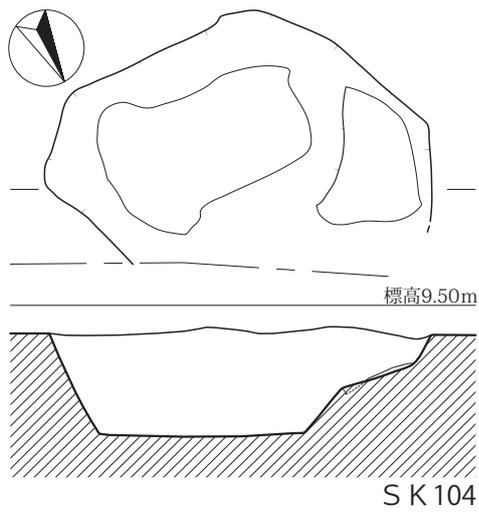
調査区中央部で検出した。平面形は円形で、北部は調査区外へ延びる。直径1.9m、深さ0.6mを測る。近世陶磁器、土師器、瓦、石製品が出土し、18世紀後半に属する。

#### **SK104** (第7・25・26図)

調査区北部で検出した。平面形は楕円形で、西部に段を有する。長軸1.9m、短軸1.4m以上、深さ0.7mを測る。埋土の上部には多量の礫や瓦を含んでいる。近世陶磁器、土師器、瓦、土製品が出土し、18世紀前半に属する。



第6図 SK37・40・44・45・58土層図、断面図、実測図 (1/30)



第7図 SK104・110・115・132・145実測図 (1/40)

### SK110 (第7図)

調査区中央部で検出した。東部は調査区外へ延びるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。長軸2.7m以上、短軸2.7m、深さ1.2mを測る。近世陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、石製品、土製品、金属製品が出土しており、18世紀前半に属する。

### SK115 (第7図)

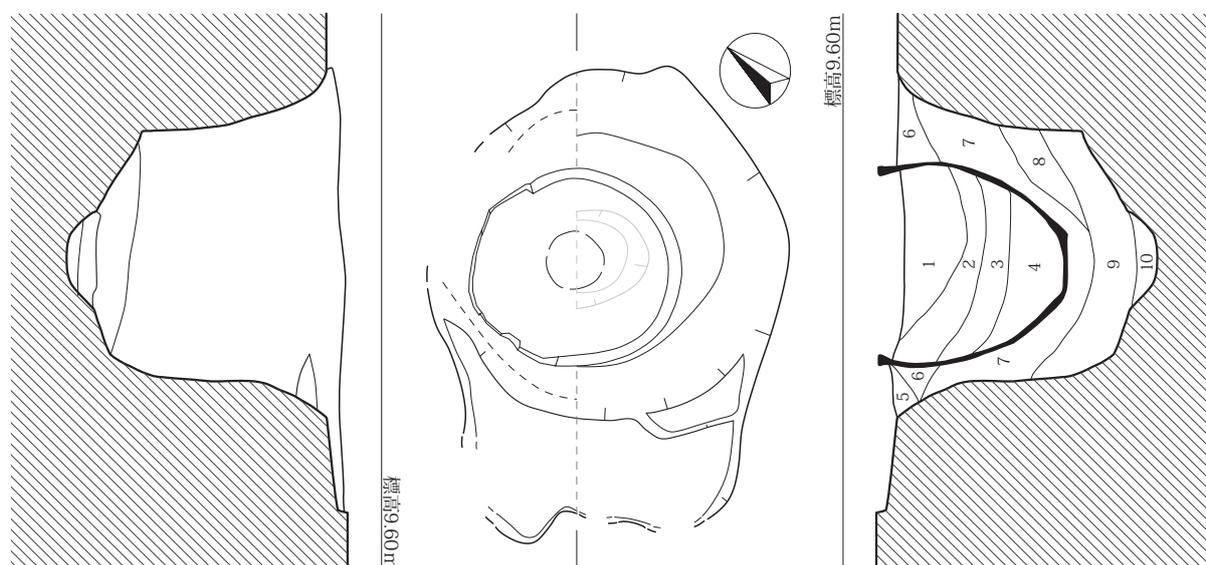
調査区北西部で検出した。東部の大部分が調査区の西側に延びるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。埋土は炭化物や焼土を多量に含んでいる。長軸2.7m、短軸0.4m、深さ1.4mを測る。近世陶磁器、土師器、瓦、石製品、土製品、金属製品が出土しており、18世紀前半に属する。壁土が被熱を受けている。

### SK132 (第7図)

調査区北西部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、西部に段を有する。長軸2m、短軸1.3m以上、深さ0.6mを測り、SK145に後出する。近世陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、土製品が出土し、19世紀前半に属する。

### SK145 (第7図)

調査区中央部で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。長軸2.6m、短軸1.7m、深さ0.5mを測る。埋土には多量の焼土や炭化物が含まれる。近世陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、土製品が出土して、18世紀中頃に属する。



1. 黒色砂質土。炭化物を多量に含む。
2. 暗灰色シルト質土。白色粘質土ブロックを含む。
3. 褐色砂質土。
4. 暗灰色砂質土。炭化物を多量に含む。
5. 黒色粘質土。
6. 黄褐色砂質土。
7. 黒色粘質土。橙色粘質土ブロックを含む。
8. 暗灰色砂質土。白色橙色粘質土ブロックを多量に含む。
9. 暗灰色砂質土。白・橙色粘質土ブロックを多量に含む。
10. 黒色粘質土。橙色粘質土ブロックを多量に含む。

0 2m

第8図 SX140実測図 (1/40)

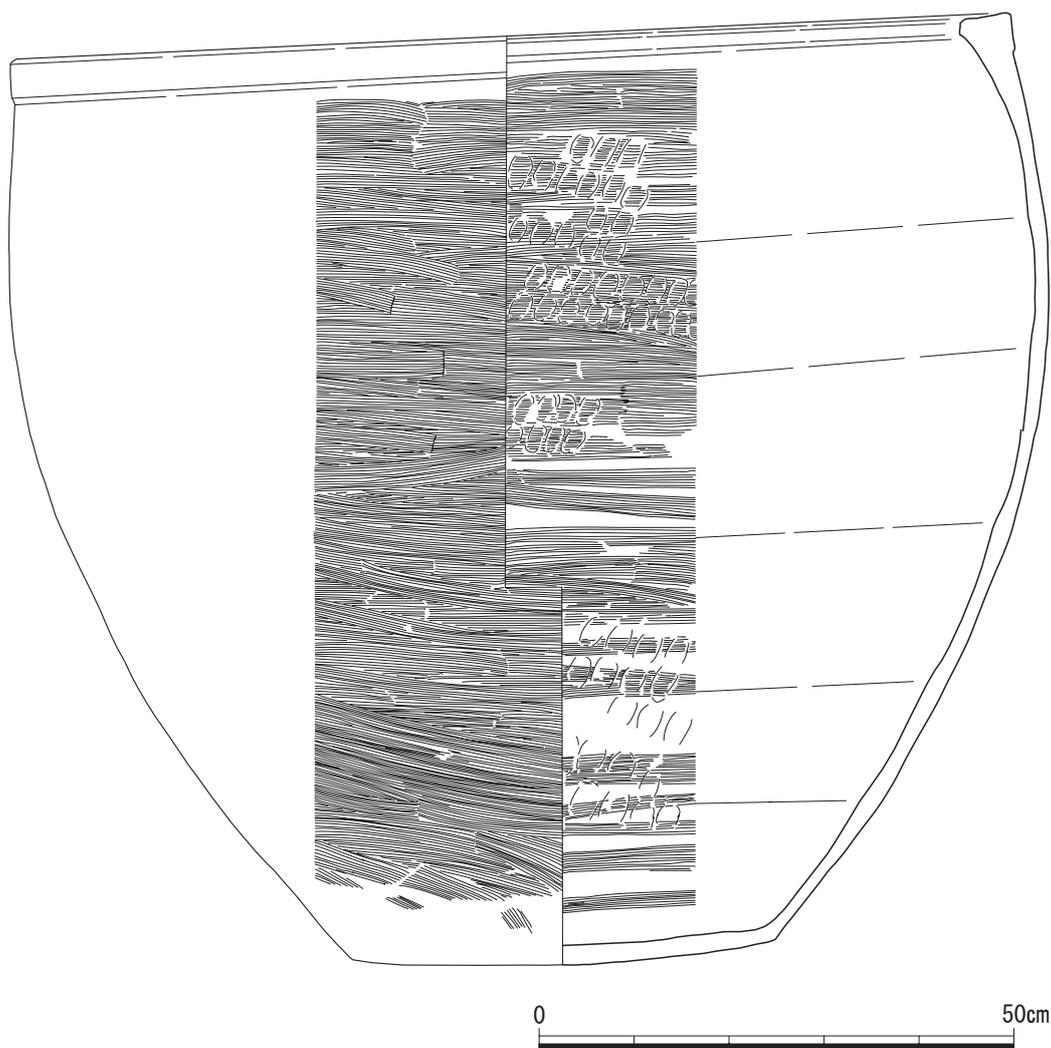
## 不明遺構

### S X140 (第8・30～32図)

調査区北部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、北部に瓦質の大甕を埋め、南部に段を有する。甕の用途は不明で、北東部の口縁が欠損していたが、ほぼ完形で出土している。長軸2.5m、短軸1.9m、深さ1.9mを測る。甕内部の底部の埋土を持ち帰り精査したところ、小礫や枝の細片が出てきたのみであった。近世陶磁器、土師器、瓦質土器、土製品が出土しており、19世紀前半に属する。

### 2. 出土遺物 (第9・33～38図、第1～3表)

近世の土坑から多量に出土した瓦片のほとんどは現地でメモ記録にとどめ、近世陶磁器、土師器、瓦、石製品、土製品、金属製品などはパンコンテナ28箱の出土遺物を持ち帰った。これまでに久留米城下町で出土してない瓦質土器の大甕のみ実測図を掲載した。その他の遺物については13～15頁の第1～3表出土遺物観察表と第33～38図の出土遺物写真を参照されたい。



第9図 S X140実測図 (1/40)

第1表 出土遺物観察表①

遺物No.	材質	器種	遺構	法量(cm)			色調		調整文様			備考	遺物登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	高さ (厚さ)	外面	内面	外面	内面	底面・高台 内印銘等		
1 第33図	磁器	容器	SE1	4.5	2.9	4.6	白磁					明治以降	201720000005
2 第33図	磁器	壺	SE1	—	4.3	(1.9)	染付				山水文	明治以降	201720000004
3 第33図	磁器	碗	SE1	—	—	(4.3)	染付		飛雲文			18世紀後半～19世紀	201720000002
4 第33図	磁器	碗	SE1	—	—	(4.4)	染付		山水文	波線		19世紀中頃～	201720000001
5 第33図	陶器	碗	SE2	(14.0)	(4.0)	(4.4)	色絵				菖蒲	17世紀末	201720000013
6 第33図	磁器	碗	SE2	10.4	4.2	5.5	染付		網目、 菊花文		角福	18世紀前半	201720000006
7 第33図	磁器	皿	SE2	(14.4)	8.9	4.6	染付		松竹梅文	四方禪文 雷文	「富貴長春」	18世紀	201720000012
8 第33図	磁器	皿	SE2	(14.0)	7.1	4.5	色絵			草花文	「朝」	18世紀前半、朝妻焼	201720000011
9 第33図	陶器	灯明皿	SE2	11.5	2.5	3.1	褐	褐				切込み三ヶ所	201720000008
10 第33図	磁器	皿	SE55	—	—	(2.0)	染付					17世紀後半	201720000078
11 第33図	陶器	皿	SE55	9.7	4.4	7.8	褐釉						201720000079
12 第33図	陶器	油瓶	SD35	—	6.3	(8.8)	鉄釉					17世紀前半	201720000039
13 第33図	土師器	火鉢	SD35	(13.6)	(12.1)	5.7	褐	褐					201720000040
14 第33図	磁器	碗	SD44	(12.8)	4.7	6.7	染付		草花文		兜巾 「山」	17世紀前半	201720000061
15 第33図	陶器	皿	SD44	6.9	4.8	2.8	白釉				砂目 兜巾	17世紀前半	201720000063
16 第33図	陶器	皿	SD44	6.9	4.4	3.5	青釉				砂目 兜巾	17世紀前半	201720000064
17 第33図	磁器	盃	SK3	7.1	2.4	3.1	染付		楓文			18世紀中頃	201720000028
18 第33図	磁器	盃	SK3	6.2	2.2	2.5	染付					18世紀中頃	201720000029
19 第33図	磁器	盃	SK3	7.0	2.1	2.8	染付		草花文			18世紀中頃	201720000030
20 第33図	磁器	紅皿	SK3	4.6	1.4	1.5	白磁						201720000032
21 第33図	磁器	紅皿	SK3	6.1	2.5	2.0	白磁		蛸唐草文			19世紀後半、型押	201720000031
22 第33図	磁器	碗	SK37	10.1	4.4	6.0	染付		松・雀文・虫		兜巾	17世紀前半	201720000042
23 第33図	陶器	油瓶	SK37	—	6.0	9.9	褐釉				灰付着	17世紀前半	201720000046
24 第33図	陶器	皿	SK37	13.3	4.5	3.0	染付		山水文			17世紀前半	201720000044
25 第33図	陶器	壺	SK37	—	4.6	3.7	青釉			重ね焼跡	砂目 兜巾	17世紀前半	201720000043
26 第34図	土師器	小皿	SK37	4.0	7.2	1.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	ナデ	糸切り		201720000048
27 第34図	土師器	壺	SK37	—	3.2	(4.7)	淡赤橙	淡赤橙	回転ナデ	ナデ	糸切り		201720000047
28 第34図	土師器	灯明皿	SK37	7.0	2.8	2.1	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	ナデ	糸切り	口縁部に煤付着	201720000049
29 第34図	土師器	灯明皿	SK37	7.0	3.6	1.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ	ナデ	糸切り	口縁部に煤付着	201720000050
30 第34図	磁器	碗	SK45	10.5	4.0	6.3	染付		東屋・梅		「大明年製」	18世紀前半	201720000139
31 第34図	磁器	皿	SK45	13.9	4.6	3.6	染付			松葉	蛇ノ目釉刺	五寸皿 18世紀前半	201720000129
32 第34図	磁器	皿	SK45	14.5	9.6	2.1	染付		山水	篋、唐草文	角福	18世紀前半	201720000130
33 第34図	磁器	碗	SK45	10.6	4.3	6.1	白磁		口鏤			17世紀後半～18世紀前半	201720000109
34 第34図	磁器	碗	SK45	(7.2)	3.7	5.0	白磁					18世紀	201720000105
35 第34図	磁器	碗	SK45	7.4	3.8	4.8	白磁		口鏤菊花文			18世紀、型押	201720000106
36 第34図	陶器	壺	SK45	5.5	4.5	6.6	鉄釉				「下」の墨書	18世紀	201720000108
37 第34図	陶器	壺	SK45	5.5	4.7	6.3	白釉		刷毛目			17世紀後半、現川系	201720000141
38 第34図	陶器	碗	SK45	13.4	(4.2)	5.9	天目風					17世紀前半	201720000134
39 第34図	土師器	焼塩壺	SK45	5.7	3.8	8.3	にぶい橙	にぶい橙					201720000114
40 第34図	土師器	焼塩壺	SK45	5.8	3.4	8.3	にぶい橙	にぶい橙					201720000115
41 第34図	土製品	壁土	SK45	(6.8)	(3.6)	(3.6)	褐	褐				被熱	201720000122
42 第34図	土製品	壁土	SK45	(5.4)	(5.1)	(6.4)	褐	褐				被熱	201720000123
43 第34図	土製品	壁土	SK45	8.7	8.2	7.3	褐	褐				被熱	201720000155
44 第34図	瓦	軒丸瓦	SK45	15.0	14.4	6.3	にぶい赤橙	にぶい赤橙	三つ巴紋			被熱により歪む	201720000116
45 第34図	瓦	平瓦	SK45	(10.8)	(14.2)	2.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙			「一」		201720000076
46 第34図	瓦	平瓦	SK45	(18.4)	(15.0)	(3.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙			「上」		201720000124
47 第34図	石製品	砥石	SK45	(15.2)	4.4	3.7	にぶい褐						201720000121

第2表 出土遺物観察表②

遺物No.	材質	器種	遺構	法量(cm)			色調		調整文様			備考	遺物登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	高さ (厚さ)	外面	内面	外面	内面	底面・高台 内印銘等		
48 第34図	石製品	安山岩 製品	SK45	15.8	9.1	7.5	黒					一部磨耗	201720000117
49 第34図	石製品	硯	SK45	(8.3)	5.9	1.4	黒						201720000125
50 第34図	石製品	硯	SK45	(9.1)	7.2	(1.8)	橙						201720000126
51 第34図	石製品	硯	SK45	(7.4)	9.0	(1.4)	黒					底面被熱	201720000118
52 第34図	陶器	壺	SK45	31.8	19.5	38.8	褐釉					17世紀後半	201720000158
53 第35図	陶器	瓶	SK58	-	11.2	(20.0)	褐釉						201720000093
54 第35図	陶器	油差	SK58	33.6	12.7	11.7	褐釉					18世紀後半	201720000095
55 第35図	磁器	碗	SK58	—	3.9	(4.1)	染付	水裂文		角福		18世紀後半	201720000091
56 第35図	磁器	瓶	SK58	—	2.3	5.7	色絵	竹、篋文				17世紀前半	201720000092
57 第35図	陶器	瓶	SK45	-	9.4	(27.3)	褐釉						201720000138
58 第35図	陶器	鉢	SK45	(2.0)	6.3	13.8	褐釉						201720000140
59 第35図	陶器	鉢	SK104	—	—	(4.1)	褐釉			四方禪文 雷文			201720000162
60 第35図	陶器	皿	SK104	—	5.9	2.1	青釉				砂目 兜巾	17世紀前半	201720000160
61 第35図	陶器	擂鉢	SK104	41.0	(13.4)	15.8	褐釉			重ね焼		17世紀末～18世紀前半	201720000159
62 第35図	瓦	丸瓦	SK104	37.1	14.3	(7.8)	—					三巴文・穿孔3	201720000161
63 第35図	瓦	丸瓦	SK104	(13.0)	7.1	4.6	—					四弁花(カタバミ)	201720000163
64 第35図	磁器	碗	SK110	14.8	—	(6.2)	色絵	椿、草、貝文			蛇ノ目釉刺	17世紀末～18世紀前半	201720000210
65 第35図	磁器	碗	SK110	(11.4)	4.4	5.7	白磁						201720000211
66 第35図	磁器	碗	SK110	8.9	3.1	4.9	染付	牡丹・唐草文					201720000214
67 第35図	磁器	皿	SK110	7.2	2.4	1.5	染付					歪み	201720000215
68 第36図	磁器	瓶	SK110	—	11.4	(19.4)	染付	草花文					201720000209
69 第36図	磁器	火入	SK110	—	(4.0)	4.2	褐釉			篋目・花		型押	201720000217
70 第36図	陶器	碗	SK110	(11.0)	(4.4)	4.6	染付		山水文			京焼風	201720000216
71 第36図	陶器	鉢	SK110	35.4	12.3	12.6	白土化粧		刷毛目			18世紀前半	201720000218
72 第36図	瓦	平瓦	SK110	(19.3)	(22.3)	(4.2)	—		刷毛目	ナデ		穿孔、被熱	201720000208
73 第36図	瓦	平瓦	SK110	(18.9)	36.6	8.1	—		刷毛目	ナデ		被熱	201720000213
74 第36図	土師器	焼壺	SK110	5.9	4.7	8.8	褐	褐	ナデ	ナデ			201720000212
75 第36図	土師器	焼壺蓋	SK110	8.0	7.7	2.8	にぶい橙	にぶい橙		布目			201720000207
76 第36図	磁器	碗	SK115	8.7	4.0	4.9	色絵			草花文		18世紀前半	201720000191
77 第36図	磁器	皿	SK115	(20.2)	(12.0)	3.1	染付		菊・唐草文				201720000192
78 第36図	土師器	耳皿	SK115	2.9～ 6.5	3.5	2.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙					201720000194
79 第36図	土製品	土壁	SK115	20.8	12.5	10.7	橙					被熱	201720000195
80 第36図	磁器	碗	SK132	10.2	4.1	5.6	染付		丸寿字・ 端雲文		「壽」	18世紀後半	201720000180
81 第36図	磁器	碗	SK132	12.4	6.1	6.8	染付		丸文			18世紀後半～19世紀前半	201720000179
82 第36図	磁器	碗	SK132	8.9	3.3	5.9	染付		草花文	五弁花 (コンニャク)		18世紀後半	201720000181
83 第36図	磁器	皿	SK132	(9.8)	5.9	2.9	染付		草花文	唐草文	「壽」	18世紀中頃、朝妻焼	201720000168
84 第36図	磁器	皿	SK132	(13.4)	(7.6)	3.2	染付			四方禪文 菊・唐草文		18世紀中頃	201720000169
85 第36図	瓦	平瓦	SK132	(11.8)	(12.7)	2.0	—		ナデ	ナデ		剥離	201720000170
86 第37図	陶器	擂鉢	SK132	35.1	13.5	12.6	鉄釉		ナデ	重ね焼		17世紀末～18世紀前半	201720000196
87 第37図	陶器	瓶	SK132	—	8.2	12.9	鉄釉		素麺手				201720000197
88 第37図	瓦質土器	火鉢	SK132	—	22.7	17.9	黒						201720000198
89 第37図	磁器	合子	SK145	5.2	2.6	1.6	白磁						201720000200
90 第37図	磁器	小皿	SK145	4.8	2.3	1.6	染付			山水文			201720000199
91 第37図	磁器	皿	SK145	11.7	6.3	3.5	染付			五弁花	角福		201720000220
92 第37図	磁器	皿	SK145	14.5	7.8	4.3	染付		唐草文	牡丹、太古 石	「朝」	18世紀中頃、朝妻焼	201720000201
93 第37図	陶器	埴	SK145	9.9	4.5	6.5	黄釉						201720000203
94 第37図	陶器	皿	SK145	(19.6)	(8.0)	6.2	黄釉		刷毛目	刷毛目			201720000204

第3表 出土遺物観察表③

遺物No.	材質	器種	遺構	法量(cm)			色調		調整文様			備考	遺物登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	高さ (厚さ)	外面	内面	外面	内面	底面・高台 内印銘等		
95 第37図	陶器	鉢	SK145	18.8	9.5	(10.5)	褐釉					内野山系	201720000219
96 第37図	陶器	香炉	SK145	14.0	6.3	8.3	緑釉					内野山系	201720000221
97 第37図	磁器	小碗	SX140	7.4	2.3	3.3	色絵		鶴・松・雲文			18世紀中頃	201720000184
98 第37図	磁器	碗	SX140	8.8	3.5	5.2	白磁						201720000185
99 第37図	磁器	碗	SX140	11.8	4.5	6.9	染付		蕉文	列点、 五弁花		18世紀後半～19世紀初	201720000183
100 第38図	陶器	碗	SX140	(10.6)	4.1	6.4	灰釉						201720000187
101 第38図	陶器	碗	SX140	10.5	4.8	7.3	灰釉						201720000186
102 第38図	陶器	碗	SX140	11.6	4.3	4.8	染付			山水文	「清水」	17世紀末～18世紀前半 京焼風	201720000189
103 第38図	瓦	隅瓦	SX140	(15.9)	(9.4)	7.0	—						201720000175
104 第38図	陶器	瓶	SX140	—	7.5	(16.3)	鉄釉		刷毛目				201720000188
105 第38図	土製品	泥面子	SX140	4.0	4.0	1.2	褐					水車	201720000172
106 第38図	土製品	土鈴	SK45	3.8	2.8	(2.3)	にふい褐						201720000110
107 第38図	土製品	泥面子	SK45	3.3		0.8	にふい褐						201720000156
108 第38図	土製品	人形	SK39	(3.7)	3.2	2.2	褐灰						201720000146
109 第38図	石製品	基石	SK45	2.1	1.8	0.4	黒						201720000120
110 第38図	石製品	基石	SE2	2.1	2.2	0.4	黒						201720000010
111 第38図	石製品	不明	SK45	1.8	1.7	0.3	白					ボタンか？	201720000128
112 第38図	磁器	面子	SK45	3.4	3.2	0.5	白磁					転用	201720000112
113 第38図	瓦質土器	甕	SX140	103.8	44.4	96.0～ 101.0	灰	灰	刷毛目	刷毛目 オサエ			201720000190

## IV. 総括

今回の調査では、17世紀以降の遺構、遺物を確認した。17世紀代の遺構は南半に集中し、最も古い遺構はS K37・44の17世紀前半である。土層の堆積状況から盛土による造成が行われていることが想定されるが、少なくとも17世紀前半には行われていることが明らかである。

井戸は3基検出され、3基とも南に位置することや、第2図でもわかるように南部が裏庭に当たることを確認できた。井戸はSE55、SE2、SE1の順に利用されている。SE1の石組の石材は阿蘇溶結凝灰岩であると考えられる。近隣では八女市長野地区で産出する。

SK45・115は隅丸方形を呈する土坑で、どちらも18世紀前半に属する。埋土には焼土や炭化物を多量に含み、遺物も2次被熱を受けたものが多い、壁土も被熱を受けていることから、火事があったことが想定される。18世紀前半に生じた大規模な火災には享保11年3月4日火事（1726年4月5日）、いわゆる「田代火事」がある。田代火事では外郭の南部、城下町中央部から南部、東部にかけて火災が広がっている。本調査で出土した遺物には熱によって著しく歪んでいるものもあることから、高温にさらされたことが推し量れる。

SX140には瓦質の大甕が埋置されており、甕の内部に付着物など内容物の痕跡はなく、その用途は不明である。大型の甕であるため調査地に運搬するのも重労働であり、近場で製作し、持ち込まれた可能性がある。近隣には筑後市の坂東寺焼などがあるが、出土した甕がどこで製作されたかは不明である。



第10図 南区全景（北西から）



第11図 北区南部全景（北西から）



第12図 北区北部全景（北西から）



第13図 南区南部全景（北西から）



第14図 南区北部全景（北西から）



第15図 調査区南西部土層堆積状況（南東から）



第16図 調査区南西部土層堆積状況（北西から）



第17図 SE 1 掘削状況 (南東から)



第18図 SE 2 土層堆積状況 (西から)



第19図 SE 1・2 掘削状況 (南東から)



第20図 SK 40土層堆積状況 (南から)



第21図 SK 45土層堆積状況 (南西から)



第22図 SK 45掘削状況 (北東から)



第23図 SK 40・44・45掘削状況 (北東から)



第24図 SK 58完掘削状況 (北東から)



第25図 SK104検出状況（北東から）



第26図 SK104掘削状況（北東から）



第27図 SK110完掘状況（南西から）



第28図 SK132完掘状況（南東から）



第29図 SK145完掘状況（北西から）



第30図 SX140甕内部土層堆積状況（南東から）



第31図 SX140掘方土層堆積状況（南東から）



第32図 SX140底部掘方土層堆積状況（南東から）



第33图 出土遺物写真①



第34图 出土遺物写真②



第35图 出土遺物写真③



第36图 出土遺物写真④



第37图 出土遺物写真⑤



第38图 出土遺物写真⑥

# 報告書抄録

ふりがな	く る め じ ょ う か ま ち い せ き ― だ い 28 じ は つ く つ ち ょ う さ ほ う こ く ―							
書名	久留米城下町遺跡 ― 第 28 次発掘調査報告―							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 408 集							
編著者名	小川原 励							
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課							
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町 15-3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9714 E-mail : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2019 (平成 31)年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
く る め じ ょ う か ま ち い せ き 久留米城下町遺跡 第28次調査	く る め じ 久留米市 ち ゅ う お う ま ち 中央町 34-1、2、3、 13、14、15	40203	031132	33° 19′ 05″	130° 30′ 34″	20180110 、 20180314	104 m <sup>2</sup>	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
久留米城下町遺跡 第 28 次調査	集落	近世	柵列 井戸 土坑 不明遺構 ピット	1 条 3 基 11 基 1 基	近世陶磁器、土師器、 瓦質土器、瓦、金属製 品、ガラス製品	片原町の町屋。 火災の痕跡や 大型の瓦質甕 を埋置した遺 構を確認した。		
要 約								
17 世紀以降の遺物・遺構を検出した。元来調査地は低湿地であったと考えられ、17 世紀前半以前に盛土による造成を行っている。土坑の一部からは火事の痕跡を示す遺物や埋土を確認する。調査区北部では、用途不明の大型瓦質甕が埋置された遺構を検出した。								
土木工事の届出日	平成 29 年 12 月 7 日			遺物の発見通知日	平成 30 年 3 月 20 日 (29 文財第 1727 号)			

## 久留米城下町遺跡

― 第28次発掘調査報告―

久留米市文化財調査報告書 第408集

平成31年 3 月 31 日

発 行 久留米市教育委員会  
編 集 久留米市 市民文化部 文化財保護課  
福岡県久留米市城南町15- 3  
印 刷 永松印刷